



64th Annual Meeting of Biophysical Society BPS2020 参加報告

生命環境科学系 修士課程 2年 矢島研究室 山戸奈々

「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」の支援をいただき、2020年2月15日から2月19日にかけてアメリカ カリフォルニア州 サンディエゴのコンベンションセンターで開催された、64th Annual Meeting of Biophysical Society (BPS) 2020 に参加しました。毎年アメリカで開催されている生物物理学会であり、各国から生物学、物理学、化学、コンピュータシミュレーション等、多岐にわたる分野の研究者が参加するものです。今回は、中国での新型コロナウイルスの蔓延により開催が懸念されておりましたが開催される運びとなり、まだ全世界的な蔓延の一手手前の時期であったため、いくつかキャンセルはあったものの各国から多くの参加者が訪れ、このような状況に関わらず盛況であったように思いました。学会は5日間にわたり、わたしは全日程の発表を聴き、4日目のポスター発表において「The motility properties of mitotic kinesin MKLP1 and MKLP2」というタイトルで発表を行いました。生命の本質とも言える細胞分裂に関わるキネシン kinesin-6 の運動に関する研究成果です。

生物物理学とは、生体内の分子がどのように形成されているのか、細胞内のさまざまな分子がどのように動いて機能するのか、及び、身体のシステム(脳、循環器など)がどのように機能するのかを理解するための重要な学問で、数学、化学、物理学、工学、薬学、材料化学など多くの分野のスキルを利用して、生命のしくみを理解する、分野融合型の学問です。

BPS は、アメリカの生理学会 American Physiological Society (APS) から独立し 1957 年に初めて学術会議が開催され、今回で 64 回目になり 6000 人以上が参加する学術会議を開催するようになりましたが、生物学会や神経科学学会の数万人の参加がある学会と比較したらまだ小規模なものようです。しかし、国内の学会にしか参加したことのない私にとっては、例えば日本生物物理学会(会員数 3000 人)と比較して倍以上の人数が参加し、会場は回りきれないほど広く、参加者の所属も多様で、研究内容も豊富で、非常に大規模だと感じました。日頃から、世界中の研究室から論文が出ていることは認識していますが、こうやって目の当たりにしてみると、まさにこうやって世界中の研究者で議論しあい、高め合って協力して科学全体を推し進めていくのだということを実感として持ち、科学の発展への貢献のため、より邁進していこうと士気が高まりました。昨今は学会等のイベントはオンライン開催で十分だという声も高まりますが、私は今回このように国際学会に参加してみて、現地に赴くことと会場に一同に会って交流することの重要性を主張します。サンディエゴの街は、明るくカラッと晴れた気候で、道では挨拶をし、店員でもないのにお店のおすすめを教えてくれるような親切でフレンドリーな人々に囲まれ、心身ともに健康に研究活動ができそうな場所でした。このような良好な環境で研究をしているひとがいるのだと認知することによって、日本の環境の外に将来想定する活動の場の可能性を広げることができました。ポスター発表 1 日目は、勇気が出ず声をかけられなかったが、2 日目は声をかけて研究内容を聞いて質問をして交流することができました。ただ黙ってポスターを眺めていても内容は理解できるが、直接身振り手振りを交えながら話をきくと、その研究の何が面白いのか、どういう面白さを持ってやっているのか、ポスターに書いていない内容まで熱量とともに聞くことができます。これが直接人と交流できる学会の良さだと思います。また、開催場所にしてもポスター発表や口頭発表にしても能動的ではなく受動的に得ることによって、偶然の出会いを生じることができます。学会会場にならなければこの街のことは認識する機会もなかったですし、学会会場に行かなければたまたま通りがかった発表で自分の研究に関連する話を発見したり、全く関連しない面白い話を聞けたりすることはなかったでしょう。このような理由から、世界的な混乱がおさまった際には、国内外の研究者が直接さかんに交流し議論しあう場が設けられ、再び参加できるようになることを期待いたします。